

もっと広がる クズリの世界

家康公も愛した漢方薬

静岡県民にとってなじみの深い徳川家康は、大の漢方薬好きであったことが知られています。家康は「和剤局方」(1100年頃に中国で発刊された処方箋集)を熟読し、自ら原料となる植物を生産して10種類以上の生薬を調合していたそうです。家康が実際に用いていた薬研や薬壺などの器具は、久能山東

「気・血・水」の巡り整える

照宮の博物館で見ることができます。

筋肉のけいれんやそれに伴う痛み、特にしゃっくりやこむら返りに対してよく用いられる漢方薬に「芍薬甘草湯」というものがあります。名前の通り、ボタン科のシャクヤクとマメ科のカンゾウという二つの植物の根から採れる生薬成分を含んでいます。

東洋医学では、人の体を構成する基本的な要素として、「気」「血」「水」という概念があります。「気」は身体のエネルギー、「血」は身体の中を流れる赤い液体(血液)、「水」は血以外の液体を意味し、この三つの要素のどれかが不足したり、停滞したりして

バランスが崩れると、不調が起きるとされています。

芍薬甘草湯はこれらのうち、不足した「血」を補い、筋肉の過剰な緊張やけいれんを鎮めることで痛みを改善するとされています。実際に、芍薬甘草湯の効果はごく短時間で発現することが多いため、救急領域でも用いられています。

ただし、漢方薬も他の医薬品と同様に、副作用がないわけではありません。例えば、芍薬甘草湯をはじめとした多くの漢方薬に含まれているカンゾウの成分であるグリチルリチン酸では、偽アルドステロン症という副作用が生

じ、血液中のカリウムが減少し、血圧上昇やむくみ、頭痛などが見られることがあります。そのため、漫然と続けて使うことは避けるのが望ましいと考えられます。

漢方薬を有効かつ安全に服用していただくために、何か疑問があれば医師や薬剤師に遠慮なくご質問ください。また、服用中の方も体調に気になる点などがあれば、ささいなことでもご相談ください。

(杉山 弘樹・県病院薬剤師会学術部員)

<毎月第4火曜日に掲載>